





## 元同級生男

あなたとは隣の席で消しゴムの貸し借りなどから始まり、  
帰りに一緒にコンビニによってアイスを食べたこともあつた。

クラスでは人気者で、地元から少し離れた大企業の子会社に就職。

学校を卒業してからも度々会っていたが  
新しい生活になじむほど思い出す時間は減っていった。

最後にあなたとあったのは2年前の同窓会。

仁義には厚い方。その割には冷静。

## 親戚の野球少年

初めて会ったのは共通の親戚の葬式。

野球がしたいから早く帰りたいと駄々をこねていたところを  
親に怒られて、葬儀場の片隅でしょぼくれていた少年にあなたは声をかける。

あなたは少年を諭しつつも夢があり努力できるのは立派だと言って褒めた。

少年は自分の夢とちゃんと向き合ってくれたあなたをずっと尊敬していた。

あなたに尊敬されたくて運動も勉強も頑張っていた。





スラム街のお兄さん

どうやって生きればいいのかわからなくて死にそうになっていたあなたが、  
がむしゃらにしがみついた先。

人に恐れられることはあっても頼られた経験はなかったスラム街のお兄さん。

何だかんだで相棒のように思っていたし、心のごこかでは

惨たらしく死んで欲しくないとは思っていたが

その夢を描くには自分たちの人生は汚すぎると思っていた。

## 同棲していたDV男

あなたとは初めは一緒に一つの目標（バンドか漫才）に向かっていたが、あなたが先に見切りをつけたことで壊れてしまう。あなたのことを行んない意味で心から愛していた。楽しくもないのにパチンコをし、家で平和そうなテレビをずっとみるとそのテレビの中に入りたくて、でも絶対に叶わないことを理解しているので泣きたくなるほど惨めで液晶をいつの日か殴り割った。やっぱりテレビの中には入れなかつたけど内心ほつとしている。しかし黒い半分の液晶に歪んだ画面、通電すると乱れた色が流れ込むのもそれはそれでが怖いので、毛布が雑にかけてある。





## 泣き男

あなたとは社会的には接点がないが、あなたが居酒屋や公園で一人で  
ぼーっとしていたところに男が声をかけ意氣投合する。  
泣き男という家業をしている。

普段着は少し時代錯誤だが、意圖的で、  
自分がどこか世界から取り残されている用に感じているのを  
服の時代を他人と変えることで客観的にも同一の事實にし、  
「人とは違うこと」に納得するため。

自分以外の兄弟はいわゆる眞っ当な職についており、  
それがコンプレックスではあるが表には出さない。

大切な人を失くしたときに心から泣けるのかずっと疑問だった。

